

# 劔仁美の道徳（第2学年）研究計画

## 1 本研究で目指す子ども

私は、低学年の道徳において**よりよい解を見いだす子ども**を目指す。これまで、道徳では「これまでの自分はどうかであったか」「これからどのような自分になりたいか」などと、自己を見つめることが重要であるとされてきた。そして、その具現のためには、これまでの自分の経験やそのときの考え方や感じ方と照らし合わせながら考えを深めることが大切であると考えられてきた。そこで、多くの授業では「(資料の場面と)似たような経験はありませんか」と問い、そのときの気持ちや経験を表出させようとしてきた。しかし、実際には似たような経験から自己を見つめることが難しいという実態がある。直に似たような経験を問うても、子どもは自己を見つめることが難しいのである。

そこで、私は、子どもがこれまでの経験とかかわらせながら自己を見つめさせるために、次のことを行う。

まず、子どもがとらえている道徳的価値についての価値観(考え方や感じ方)を表出させる。次に、子どもの価値観と同様だと感じられるような資料の前半場面を提示する。その後、子どもが思っていることと異なる場面とずれが生じるような資料の後半場面を設定する。これにより、子どもは自分が元々もっている価値観が揺さぶられ、「この場面では、どうすることがよいのか」「自分だったらどうするか」と道徳的価値に基づいてよりよい解を見いだそうとする。そして、自分の考えをもった子どもに、「何のために、そうするのか」と問い、行為の意味を考えさせる。このように、自分の経験を基に、どうしたらよいかを考え、場面や状況に合った行為の意味を判断することは道徳的な判断力につながると考える。ここで重要となるのが、友達の価値観(考え方や感じ方)である。ここでは、友達の意見を聞く場を設け、自分の考え方が広がったり変容したりすることを促す。

このように、子どもの価値観を表出させ、資料の場面や状況に合った行為の意味を判断させることで目指す姿を具現していく。

### (1) 「中核的な知識や技能」

価値観(価値に対する考え方や感じ方)の高まり

### (2) 「学びをつなぐ力」

道徳的判断力

関係付けるすべを用いて、自分の考え方や感じ方と友達の考え方や感じ方とを結び付け、場面や状況に合った行為の意味を判断する力。

## 2 主張する働き掛け

資料は、既存の資料を用いることとし、主人公が迷ったり困ったりする場面と主人公が取った行為が分かる場面に分割して提示する。

子どもは、自分の生活経験から様々な考え方や感じ方をもっており、それぞれの生活経験や生育環境などで異なる。このような子どもに、次のように働き掛ける。

### 働き掛け1

**主人公の気持ちに共感させた後に「自分だったらどうするか」と問う。**

個々の価値観(価値に対する考え方や感じ方)を表出させるための働き掛けである。資料の前半場面(主人公が迷ったり困ったりする場面)を人形劇で提示しながら読み聞かせる。資料は、子どもの生活経験に近い場面を設定し、主人公の気持ちに共感を促す。主人公の気持ちに共感した子どもに「自分だったらどうするか」と問う。子どもは、主人公の気持ちを考えながらも、自分が取るであろう行為を考え「自分だったら〇〇する。それは、△△だから」(C0)などと、行為とその理由をワークシートに記述する。主人公の気持ちを酌みながらも、自分だったらどうするかと考えている姿をC0とする。

資料の提示は、人形劇で行う。人形劇は、枠の中で行う。枠の中で場面を提示することで、その場で起こっている状況や、登場人物同士のかかわりを限定して提示することができるからである。また、場面を枠で限定することで、子どもは資料の場面に入り込みやすくなる。

### 働き掛け2

主人公が取った行為を提示し「主人公がしたことをどう思うか」と問う。

問いをもたせるための働き掛けである。資料の後半場面(「対象」)を提示する。資料の後半場面は、主人公が取った行為が分かる場面である。主人公が取った行為は、一見するとよいように思えるが、よく考えるとよりよい行為とは言えないものである。「対象」を提示し、「主人公がしたことをどう思うか」と問い、ネームプレートで主人公の行為を評価させる。評価は、右図のような数直線上にネームプレートを貼らせて行う。子どもは、自分とは異なる友達のネームプレートの位置を不思議に思い、なぜその位置に貼ったのか知りたくなる。そこで、ネームプレートを貼った根拠を説明させる。子どもは「主人公がしたことはよいとは思いますが、もっと□□した方がよかったのではないかと、その場の状況を考えてよりよい行為を考える。そして、「自分が主人公だったら〇〇する。でも、主人公はすぐにはしなかった。それは、なぜか」と考える。



### 働き掛け3

「何のために、そうするのか」と問い、行為の意味を考えさせる。

多様な立場や異なる視点をもたせるための働き掛けである。〇〇することがよいことだと考えている子どもに、「何のために、そうするのか」と問う。行為の意味を問い、行動の原理を考えさせる。子どもは、多様な立場や異なる視点で行為の意味を考える。考えたことを交流することで、自分とは異なる考え方や感じ方に触れることができる。自分と異なる考え方や感じ方に触れた子どもは、新たな視点を獲得し、よりよい解を見いだす子どもとなる。

### 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛け

今日の話合いで、新しく気付いたこととその理由を問う。

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けである。資料の場面を通して、行為の意味を考えた子どもに「今日の話合いで、新しく気付いたことは何か」と問う。子どもは、関係付けるすべを用いて、一連の学習で得た新たな視点(行為の意味)を基に気付いたことや考えたことを判断し、記述する。そして「気付くことができたのは、なぜか」と問い、ワークシートに記述させる。子どもは「友達と話し合ったからだ」と友達と交流することや、友達の考えを聞いたからだと考える。新たな気付くことやその理由を考えられたのは、友達の考えを聞いたからであると記述した子ども(Cn)が「学びをつなぐ力」の有用性を自覚した姿である。

## 3 検証

### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な知識や技能」を獲得することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」の有用性を自覚することができたか。

### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け3を受けて、自分とは異なる友達の考え方や感じ方に触れ、新たな視点が加わったかどうかをワークシートの記述から検証する。
- ② 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けを受けて、関係付けるすべを用いて、新たに気付いたことがあるかをワークシートの記述から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けを受けて、本時の話合いで新しく気付くことができた理由をワークシートの記述から検証する。

## 4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(7月) 「なぜ、正直でいることが大切なのか？」(2時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「なぜ、謝るのか？」(1時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「誰のために、何のために？」(2時間)